

ファンタジー に魅せられて



say

『はてしない物語』との出会い

『はてしない物語』と言って、伝わる人はそんなに多くはない。『ネバー・エンディング・ストーリー』という映画の原作だと言うと、それならと頷く人はそれなりにいる。が、自分も読んだよ、という人とは中々会うことがない。

私がこの本を読んだのは、幼稚園の頃だ。そう話すと、大抵びっくりされてしまう。対象年齢は小学校高学年の児童文学で、かなり長いお話だからだろう。勿論、端からひとりで読めた訳ではない。寝物語に親が読み聞かせてくれていたものが、どうしても続きが気になって夜が待ちきれなくなり、昼間に自力で読もうと努力し、最初は平仮名しか読めなかったものが、段々と難しい漢字も読めるようになっていった。

成長してから、母に言われたことがある。子供が出来たら、本の読み聞かせをしようと思っていたのだと。できないこと、苦手だと思うものは少ない方がいい。大人になってから、「なんで本なんか読めるようにしたんだ」と恨まれることはなかろうと思ったのだそうだ。

活字恐怖症で、なんとなく敬遠してしまうという人は周りにもいて、そういう友人は読書の量も少ないし、国語の授業でも課題文を読む段階で相当苦労していた。

私は時々読書量を誉められることがあるけれど、読もうと思って読んでいる訳ではない。喉が渴いたから水を飲むのと同じように、読みたいから読む。そこに文字があるから思わず読んでしまう。ただそれだけなのだが、当たり前のようにそうして本を読むことで読書のコツみたいなものを掴んで、語彙も増えるし読むスピードも速くなる。確かに、親の希望を押しつけて無理に習い事をさせるとか、洋服を着せるとかいったことと違い、本の読み聞かせは感謝こそすれ恨みに思うことはなかった。

実を言うと、母のしてくれた読み聞かせはただ本を音読していただけではなかった。成長して自分で読んでみるようになって初めて知った。なんと、バスチアンがアトレユに剣を向けるシーンがあるではないか。幼い私にはショックだろうと、母が適当に話を作って読み飛ばしてくれていたのだ。

『はてしない物語』は、読むことの楽しさを最初に教えてくれた本であり、ファンタジー世界の勇者とは言え順風満帆にすべてがうまくいくわけではなく、だからこそ読者をひきつけてやまないのだと教えてくれた本であり、母の愛を教えてくれた本でもあるのだ。

初めて触れた『指輪物語』の世界

小学校高学年のときだ。担任の先生が読書を奨励する人だった。大半のクラスメートが嫌々本を読んで感想文を提出している中で、喜々としてハイペースで感想を長々ノートに書き付けて提出する私が目立ったのだろうか。

「赤毛のアンシリーズを読んだことがある？」

と訊かれた。赤毛のアンは読んだことがあったけれど、アンの青春などそれ以降のものは読んだことがない。そう答えると、なんと先生ご自身所蔵の本を全巻貸して下さった。元気澆刺なお転婆のアンしか知らなかった私にとって、とても興味深いお話だった。

何冊にもわたるお話を全て読み終えてお返ししたところ、次に貸して下さったのが『指輪物語』である。

「とても長いお話だけれど、アンシリーズも読めるあなたならきっと読めるだろうし、私が小さい頃に読んでとても面白かったから」

と。その時は、先生が貸してくれたというだけで、外国で当時熱狂的なファンを産み出し、私が日頃やっているファンタジーのロールプレイングゲームにも出てくるエルフやホビットを生み出したのはこの物語だ、などということもまったく知らなかった。知らないままに、兎に角読み始めた。

本当に本当に、とても長いお話だった。流石の本好きの私も、途中で読み疲れたぐらい長かった。けれどそんなことはどうでも良いほどに、面白かった。

生まれながらの勇者が敵を倒して世界を守るというよくあるお話とは違って、主人公はホビットという小人。人間族から見ればとても小さくて子供のようにしか見えない、つまり非力に見える存在だ。しかし根が朗らかで、粘り強く諦めない。人間やドワーフやエルフや、いろんな種族と協力し合いながら、自分たちの住む世界を救う為に旅を続ける。その旅というのも、敵をやっつけるというのではなく、不思議な力のある指輪を敵の手に渡らないように火山に放り込んで抹消するのが目的。

長い旅の中には裏切りや恋、別離、仲間の死、様々な苦難が待ち受けている。初期からフロドたちホビットを助けてくれた魔法使いガンダルフとはぐれた後、一向をひっぱってくれたアラゴルンが「もう駄目だ」と思うシーンでは本当にもう駄目だと絶望的になり、泣きそうになった。

本当に敵の黒い騎士たちは怖くて怖くて仕方がなかったし、王の帰還の章では感動に打ち震え、最後まで読み終えたときには長い旅を無事に終えられた満足感と疲労感でぐったりとってしまった。

実際に起きた物語が忠実に書き取られているようにしか思えない真実味溢れる面白さをここまで感じさせてくれたのは、この物語が初めてだった。

それまで抱いていた、妖精や小人たちが出てくる『ファンタジー』の世界とはかけ離れた、恐ろしいゴブリンやトロールの存在。旅に出る為には食糧を持たなくてはならず、それは日持ちがするものをたくさん持たなくては飢えてしまうこと。かと言って沢山持ちすぎれば荷物が多すぎて体力が持たないし、火を熾せば煙で居場所がばれて襲われる。戦えば怪我をし、どちらかが命

を落とす。

圧倒的に迫り来るファンタジー世界の存在感。物語というものの素晴らしさを教えてくれた。

文字を綴るだけで壮大な世界観と物語を人に伝えることが出来、それを読むことで与えられる
勇気や感動。物語の可能性を感じたことが、創作活動への興味を与えてくれた。

こんなに素晴らしい物語を作り出すことに、どんな形であれいつか携わることが出来れば。

そんな夢を未だに持ち続けている。

『ゲド戦記』に見る失敗から得るもの

名前は聞いたことがあるけれど、つい読まないままになっている本というのは、読書家でも誰しも一冊はあるのではないだろうか。

名作であればあるほど、何故か機会を失ってしまいがちな気がする。いつでも読む気になれば読めるという安心感のせいだろうか。

私にとってのそんな名作のひとつが、『ゲド戦記』であった。自分の好きな漫画家さんが好きだとおっしゃっておられたのをきっかけに、やっと手に取ってみた。

今でこそ、ジブリで映画化された為に知っている人も多いだろうが、その当時はそこまで知られた物語でもなく、リクエストを入れて取り寄せて貰って読んだ。

この本の何が面白いかと言えば、主人公であるゲドが未完成であることだ。自分のプライドや過信から過ちを犯し、一生消えない傷を負う。その人間臭さが一にも二にも魅力なのである。

また、魔法という規制概念をも打ち壊してくれた。それまで魔法のイメージと言えば、呪文を唱えれば人知を越えた素晴らしい力が発動されるものだった。しかし、ゲドの世界の魔法は違う。壊れた壺を直す魔法を使うには、どの破片がどこに付けば修復出来るのか、それがわかっていなければならない。便利に使える万能なものではなく、ひとつの力に過ぎない。今雨が降っていて困っていて、雨を止ませる魔法はあるけれど、そのせいでどこか別のところに雨が降り害をもたらすかもしれない。だから、簡単に魔法は使えないのだ。

2巻以降は主人公を譲り、脇役に回るゲドなのだが、1巻で失敗を犯したゲドだからこそ人を、世界を救うことが出来る。聖人君子だから、勇者だからというのではなく、ひとりの人間が自分の経験や知識、そして人の力を借りて進んでいく姿に勇気を貰える。

また、面白かったのが名前についての概念だった。通常名乗っている名前とは別に本当の名前というものがあって、ゲドで言えば普段はハイタカと名乗っている。魔法で相手を思うがまま操ろうと思ったら、相手の本当の名前を知る必要がある。

だからこそ、親友が本名をゲドに明かしてくれるシーンは胸が熱くなる。

まるで親たちにしか明かさず、口に出すことも普段は憚られる日本の諱のようである。

こうした魔法のある世界の様々な文化の設定が、物語に深みを持たせてくれる。その中で私たちと変わらない人間くさく失敗し、怪我も負い、叱られもするゲドだからこそ、私たちに強く惹き付けるのだ。